

安全通貨円とスイスフランの金融政策

予想通り、と言うかリークされた情報通り、日銀は政策金利を0.25%引き上げ1%とした。それに国債買い入れの減額は来年第一四半期まで続け、4月に減額を停止し、月2兆円のペースで国債を購入する。

為替レートはこの決定を受けても影響はなかった。為替に影響を与えるためには利上げを続ける確たる見通しが市場で醸成されることに加え、日本への資本流入策を強化する必要がある。

日本を含め多くの国で通貨安に頭を悩ませている中で、スイスは逆だ。いつものことだが通貨高を抑制する策を講じてきた。市場介入や金利政策を通じてだ。政策金利は昨年6月にゼロ%に引き下げて以来ゼロ%を維持している。一時はマイナス金利への移行も取りざたされた。

代表的な安全通貨の一つとして市場で認識されてきた点は円と同じだが、スイスフランは円と違い依然として強い通貨の特性を維持している。

年初来のレートを見ても円は対ドルで2.5ほど円安になっているが、スイスフランは同レベルだ。フラン高対策を施してもだ。

ところで日銀の植田総裁は今回の政策決定会合は欠席し、リモートでの投票もしなかった。職業倫理意識の強い総裁にとって辛い決断だったろう。早い回復を祈るばかりだ。

今週はFOMCも開かれる。いよいよケビン・ウオーシュの出番だ。議長として初めて会議を取り仕切る。政策金利の変更はないこ

とは確実なので、焦点は会議後の記者会見で新議長が話す内容になる。

トランプ大統領やベッセント財務長官は、イラン戦争が終結すれば原油価格が大きく下がりインフレは緩和されると見る。ならば AI による生産性向上が利下げ環境を醸成するとの議長の持論も説得力を持つ可能性はある。ただこの論にはたくさんの if がある。

イラン戦争が終結すれば、原油価格が大きく下がれば、AI が生産性向上を促せば、生産性向上が利下げに結びつけば、などだ。

いずれにせよ新議長が何を話し、何を話さないかは注目だ。